

滋賀県

手紙 琵琶湖のあなたへ

近江兄弟社中学校 一年

福岡 周

「私はあなたのことをよく考えもせず、食器洗いをした時、お皿に残ったマヨネーズをふき取らずに流してしまいました。いやな思いをさせてしまい、ごめんなさい。」

私が食器を洗っているのを見た母が「ああ」と声を出したので顔を見ると、とても残念そうにしています。何かが遅かったようでしたが、私には理由がわかりませんでした。母が「一緒においで」と庭の地面にある土がついた白いふたを開けて私にみせました。そこには白いかたまりがぼろぼろと浮いていて、泡とともに生臭いにおいがしました。思わず「くさい、気持ち悪い」と私はふたをしめました。すぐに母が言った言葉は「ふたをしめてもその油は消えたことにならないよ」と。

それから日がたっても、なんとなく地面の下が気になっていました。学校へ行く途中もマンホールの下に流れていく水のことで、その行く末が心配になりました。

翌日図書館へ行き、水の本が書いてある本を探しました。特に滋賀県の下水がどこに行くのか知りたかったので、『琵琶湖のカルテ』（今関信子著）を司書の方に紹介してもらいました。琵琶湖の水質などを調査し科学者達が集まるで医者のように琵琶湖の状態を心配していました。私はその本を一気に読みました。そこには、人間の活動環境の変化が琵琶湖の調子を崩していることが書かれていました。合成洗剤により赤潮が発生、魚が多く死に、その水で洗たくをした布おむつを赤ちゃんが使ったことで肌がかぶれたことなど、色々な影響が出たことを知りました。私は滋賀県に住みながらも、合成洗剤をせっけんに変える「せっけん運動」のことを知りませんでした。今まで身近なところを見ようとせず、水をよごしていることに無関

心だった私は自分はずかしく思いました。

家で使用しているせんたく洗剤の袋にかかっている成分を調べてみました。そこには、「界面活性剤、蛍光増白剤」の言葉が見えました。そのことも本に書かれていました。実験をすると合成洗剤をまぜた水その中にアユを入れると死んでしまいました。水は透明できれいな水に見えたが、その蛍光増白剤は、洗たく物を輝くような白にします。その美しい白が、魚たちの命をおびやかしているのです。私はその悲しい実験の結果をみて、白い服が真っ白でなくてもいいのにと思いました。同時に私が着る制服の白いカッターシャツを思い出しました。

「琵琶湖の水をきれいにしたい」と、これから合成洗剤をせっけんにしていこうと家族で話をしました。いまからは琵琶湖のために行動していきたいと思えます。そしてもう、マヨネーズを流してしまう私とはさよならします。この取り組みを新しい制服を着ている仲間にも広めていきたいです。きっと琵琶湖も生き物も喜んでくれるだろう。まずは私が今、自分にできることから始めたい。

「琵琶湖のあなたへ、お久しぶりです。以前の私は、あなたはきれいな水で元気に過ごしていると思っていました。人間と共に生きること、苦しんでいたのです。私が小学五年生の時に行ったフローティングで船上からみたあなたは、緑っぽく顔色が悪くみえました。私は生活を振り返ってみました。毎日使った流していた水のよごれや、水の行方を今まで知ろうとしませんでした。私は今自分にできることをしています。小さな行動なので、大きなあなたには何も感じないかもしれないですが、これから続けて、その活動を広めていきたいと思えます。あなたにこの先、私達人間と共に生きることを喜んでもらえるように。また会いに行きます。さようなら。」